

ゲージの中の

一年 大津亜由美

「二〇五頭」この数字は、一日に殺処分されている犬・猫の数だ。インターネットの記事には、手短にその数字が書いてあった。まるで、私達には関係ないような。そのためかテレビで聞いたことのある数よりも重く、悲しくなった。私は、小さい頃から「命あるものは、むやみに殺してはいけない。」と思っていた。日本の動物愛護管理法でも、「動物は命あるもの」と決まっている。しかし、動物虐待は後をたないのだ。そう考えるだけで、胸が張り裂けそうになった。

七年前、私がちょうど小学一年生の時だ。犬を飼いたくて、お父さんとお母さんに頼んだことがあった。しかし、両親ともに動物を飼うのは大きくなってから、と話を聞いてくれなかった。なんで、分かってくれないのか、と泣きじゃくりながら怒ったことをよく覚えている。小学二年生の頃、母が突然

「亜由美、保護犬って知ってる?」

と言ってきた。耳にしたことはあったが、詳しく知らなかった私は調べることにした。調べるとそこには、衝撃的なことが書いてあった。

「残り四日」

そう、そこには、犬や猫の命のタイムリミットが書いてあったのだ。驚きと悲しみで涙がでた。その後、家族で動物の保護施設に行つて、実際に保護動物とふれあった。その時感じたのは、人間に少し怯えている表情をしている動物が多かったことだ。普段から居るはずの施設の人が近づいた時、大きな鳴き声を上げたり、噛み付いてきそうになったりする動物が多かった。怖がっている私を見てすぐに施設の人が

「いたずらでやってるんじゃないよ、私達を受け入れようとしている証拠だよ。」

と優しく話してくれた。どうやら、ここに居る半数以上の動物は昔、飼い主に捨てられたり虐待されたりしていたようだ。動物を飼うということは、一生をともし、大切にする「責任」がついてくるのだ、とその時初めて感じた。

私は、中学生になった今でも動物を飼ったことがない。それは、保護施設の記憶がトラウマになったからでも、動物が嫌いになった訳でもない。ただ、自分がすっかり「責任」を持って暮らしていく自信が、まだないのだ。動物の立場になって、考えるようになったからでもある。そう考えるきっかけをくれたのは、他でもないあの保護施設に行つたからだと思う。

私達にできることは限られているかも知れない。しかし、動物の問題について「責任」を持つて考える事は私達人間ができることなのではないだろうか。そして、ペットショップのガラスの向こうにいる動物だけでなく、保護施設にいるゲージの中の動物の存在も、できるだけ多くの人に認識してもらいたい。